



News Letter

2022年12月1日 発行

No. 121

The Iida City Institute
of Historical Research

飯田市歴史研究所

〒395-0803

長野県飯田市鼎下山538

TEL 0265-53-4670

FAX 0265-21-1173

E-mail iih@city.iida.nagano.jp



飯田市 歴研ニュース

第19回飯田市地域史研究集会

「満洲移民—下伊那から再考する」を開催しました

9月10日・11日に「満洲移民—下伊那から再考する」をテーマとして第19回飯田市地域史研究集会を開催しました。

1日目の第1部「満洲移民を再考する」では、最新の研究成果に基づき、移民の送出過程に焦点を当て、満洲移民とは何であったのかを議論しました。最初に加藤陽子さん（東京大学、歴史研究所顧問研究員）の講演「近代



加藤陽子さん

本島和人さん

齊藤俊江さん

日本の戦争—森本州平日記から考える—」では、いまだ収束の兆しすら見えないウクライナとロシアの戦争を理解するうえでも、日中戦争に至る歴史展開を改めて検証することの重要性が指摘され、当時の国際関係や国内の動向を跡付けつつ、近代侵略戦争の特質が浮き彫りにされました。続く本島和人さん（歴史研究所調査研究員）の講演「日中戦争下の募集と送出一地域指導者と下伊那の人びと—」では、日記や書簡、新聞、時報・村報などを通して語られた地域指導者の言葉に着目し、下伊那における移民の募集・送出の過程が詳細に明らかにされました。また、齊藤俊江さんの報告「下伊那の中の満洲—原資料を読み解く—」では、戦後開拓までをも視野に入れた長年の調査研究成果が紹介されるとともに、満洲移民からみた下伊那の社会状況が考察されました。



橋本珠子さん

手塚孝典さん

三沢亜紀さん

2日目の第2部「満洲移民と向きあう」では、満洲移民の加害と被害の歴史を受けとめ、記録や記憶を未来へ継承することの意味を考えました。橋本珠子さん（満洲移民体験者）の報告「満洲体験が人生の指針に—看護師として生きる—」では、生まれ育った満洲での暮らし、逃避行と収容所の惨状、引き上げ後から現在までの経験が語られました。手塚孝典さん（信越放送）の報告「沈黙を聴く—ドキュメンタリーの現場から—」では、制作したドキュメンタリー番組を手がかりに、満洲移民の経験・記憶が今を生きる人々にも重くのしかかっていることが指摘されました。最後の三沢亜紀さん（満蒙開拓平和記念館）の報告「想起と対話の「場」—記念館レポート—」では、開館10周年を迎えた満蒙開拓平和記念館が、多様な立場の人々や情報が交差する場として存在してきたことを振り返るとともに、これからの役割についてもお話いただきました。

また、2日目には、自由論題報告として、竹村雄次さん（歴史研究所特任研究員）の報告「明治30年代の飯田町文化の高まり—歌舞伎座新史料を中心に—」と、塩澤元広さん（高森町歴史民俗資料館）の報告「江戸時代後期の伊那地方における離縁と女性」も行われました。昼休みには、満洲移民に関する写真がスライドショーで公開されました。



竹村雄次さん

塩澤元広さん

昨年に引き続き、新型コロナのため、オンラインでの開催となりましたが、2日間でサテライト会場を含め延べ244人の参加者を得て、盛況な研究集会となりました。

羽田真也（歴史研究所研究員）

王子製紙の遠山進出を記録する 経営史料について

明治28年、日本でも屈指の製紙会社であった王子製紙は、遠山の共有山の伐採権を購入して現在の静岡県磐田市に中部工場を建設します。王子製紙は遠山に多数の人夫や杣などを入山させて木材を伐採させ、それを遠山川・天竜川によって運搬し中部工場にまで運び込んでいました。多くの山林労働者がやってきたことで和田村（現在の飯田市南信濃和田）を中心に遠山は経済的に繁栄しましたが、山林資源の枯渇・破壊や地域社会の混乱を招いたとも語り継がれています。明治から大正期にかけての王子製紙の遠山進出を記録する史料は、飯田下伊那にも様々に残っています。飯田市美術博物館学芸員で遠山の史料整理を行われている近藤大知さんが発見された南信濃和田の故後藤忠人氏が旧蔵していた新史料を紹介します。



今回発見された新史料です。
紙袋の中に、綴りが1冊残されています。

今回発見されたのは「明治四十四、五年代 王子製紙 出材部 会計簿」という袋に入った史料で、王子製紙が和田に設けた出張所（「王子製紙株式会社中部分社和田派出所」という罫紙が用いられています）の史料の綴りです。当時の王子製紙の経営の内部史料であると考えられ、極めて重要なものです。明治44年に王子製紙が和田に設けた出張所（派出所）で作成された文書が中心で、王子製紙と和田を中心とする地域社会の関りの様子が示されます。

史料内容の一部を紹介します。明治44年8月1日付で王子製紙から当時の和田組合村長にあてて出された文書が収録されています。そこでは、降雨によって道が3、

4カ所破壊されてしまい駄馬の通行が不可能になり貨物運搬に支障が生じたので至急修繕に着手してほしい、と会社の側が村長に要望していることが確認されます。当時の王子製紙と村の関係性の一端がうかがい知れます。

それ以外にも様々な史料がこの綴りには含ま



王子製紙から、当時の和田組合村長に対して提出された道路修繕の要望です。雨によって道路が破壊され荷物運搬などに支障が出ているため、改善を求めています。

れています。「盆用品請求書」では、遠山の各山に入山させた山林労働者たちが所属して働く山の伐木所が、彼らのためのお盆用品を和田の派出所へ要求したものです。米粉、小麦粉など様々な品物を請求していることが明らかになります。飯田市歴史研究所には、和田の萬問屋であり、王子製紙の労働者のための商品供給も担っていたと考えられる大屋商店の史料群である佐藤家文書が寄贈されています。そういった史料と対比することで、王子製紙の進出が遠山の地域社会・経済に及ぼした影響をより詳しく理解できるのではないかと考えられます。

王子製紙の経営史料の多くは東京にある「紙の博物館」に残されています。今回、飯田下伊那で発見されたのは非常に意義深く、また驚くべきことです。飯田下伊那に残された経緯も含め検討が必要になるでしょう。王子製紙の進出は遠山、そして飯田下伊那の近代を理解する上で非常に重要です。今後も皆様のお力を借りつつ史料の調査や研究を少しずつでも進めていきたいと考えています。



「盆用品請求書」という文書です。王子製紙が遠山の山林に入山させた労働者たちのために、お盆のための日用品を調達していることがわかります。

刊行開始から約70年経過した『信濃史料』と 刊行終了後約30年経過した『長野県史』

田島 公（東京大学史料編纂所古代史料部門教授／顧問研究員）

県内の最有力学会・信濃史学会は伊那史学会等21団体の賛同を得て、2022年5月18日付で県知事と県教育長に対して、1992年に全38巻70冊の刊行が完了した『長野県史』の「現代編」等の編纂事業の実施と公文書・地域資料の保全・活用の充実を求める要望書を手渡したが、これは2021年11月30日に長野県議会への同内容の請願書提出と同年12月10日の全会一致での請願採択に基づいており、県側も請願に対して前向きに動き始めているという（『信濃』74巻9号 2022年9月）。要望書の2番目には、既発行の『信濃史料』・『長野県史』・『長野県教育史』等を補充すべき資料の収集・整理・記録をする事業の検討が提言されている。『信濃史料』全30巻32冊（信濃史料刊行会 1951～69年）は考古資料編2冊（巻1上・下）と寛永20年（1643）迄の記録史料を編年順に収めた歴史編30冊（巻2～28、補遺編上・下、索引）に大別できるが、考古資料編と索引を除いて、Webで利用出来るようになった。その契機となったのが東京大学史料編纂所の共同利用・共同研究拠点の2011年・12年度一般共同研究課題「『信濃史料』古代編（2・3巻）に係る未収史料の収集に関する基礎的研究」（代表者：福島正樹〔長野県立歴史館・当時〕）であり、私が所属する古代史料部の教員が受入担当となった。その後、14年度に長野県立歴史館を中心とした実行員会が文化庁の補助金を得て、『信濃史料』のデジタル化を実現し、ADEC（アダック）・デジタルアーカイブシステムにより網文と版面画像が検索可能となった。『信濃史料』は坂本太郎史料編纂所長（当時）が監修者に名を連ねており、刊行に史料編纂所の教員が大いに協力した。合併して広域化した飯田市関連の古代・中世・近世初頭の史料をWEB検索する際にも便利であるが、肝心の『信濃史料』は、刊行開始から71年、刊行終了後から53年も経過し、漏れている史料や誤った史料翻刻も見つかっている。上記の県の動きは注目すべきであり、歴史研究所は近世・近現代史では、県のこうした動きを既に先取りしている感があるが、『信濃史料』や『長野県史』通史編の古代・中世（1986～9年）に関連し、飯田市関連の古代・中世史料のデジタルデータ化（一字検索や画像公開）と補訂（最善本による校訂）や新史料の補填・蒐集（飯田市域外が多いと思われるが）も進めるべきであろう。



飯田市歴史研究所 年報⑳

特集「暮らしのなかの景観—その歴史と継承」は、昨年度の飯田市地域史研究集会の成果をまとめたものです。豊かな自然環境と人びとの暮らしの中で形成されてきた、飯田下伊那の景観の歴史や意義、さらには将来への継承について、グローバルな視点と地域の視点から検討した7本の論考を掲載しています。

また、小特集「下伊那の宗教文化ネットワーク—松下千代と松尾多勢子を中心に—」では、昨年末に開催したワークショップの成果をうけ、江戸時代後期～明治維新时期に活躍した松下千代と松尾多勢子を対象に、この地域の宗教・思想・文化の特質を探った4本の論考を掲載しています。

そのほか、17世紀の清内路村を分析した研究ノート、書評、調査報告など、地域史研究の最新の成果をお楽しみください。



2022年12月 刊行予定

飯田市歴史研究所 編
B5判 250頁 定価2,100円

近現代史ゼミの20年

本ゼミは2003年に発足し、飯田町（主税町）出身の歴史学者である古島敏雄の『子供たちの大正時代』（平凡社）の講読から始めました。私たちは、こうした記憶にもとづく歴史叙述の方法に学び、ゼミの共同研究として飯田町に子ども時代をすごした人たちの聞き書きを「オーラル・ヒストリー・飯田町の社会史」として取り組んできました。その成果は『飯田町の暮らし』の第1集を2005年に刊行し、2021年には第8集を刊行することができ、42名の固有の人生経験に向きあってきたこととなります。その記憶の継承が地域歴史遺産として、地域再生に資するものとなれば幸いです。



さらに、2007年から『胡桃澤盛日記』（大正12年から昭和21年）の翻刻作業をゼミで始めました。胡桃澤盛は、旧河野村に生まれ、大正デモクラシー期には青年運動で活躍しながらも、戦時下には、村長として満洲分村移民を決断し、戦後、自死を遂げる人物です。翻刻作業は胡桃澤盛日記刊行会に引き継がれ、2015年に聞き書き集として『別巻・「胡桃澤盛日記」の周辺』が刊行され、『胡桃澤盛日記』の全7巻の刊行を完結することができました。その翻刻作業と並行して、2011年から、ゼミでは『胡桃澤盛日記』の講読をはじめ、ゼミ論集『胡桃澤盛日記と南信新聞』等に集約して、2021年には第10集を発刊するに至りました。



本ゼミの愉しみは、聞き書きの編集にしても、日記の講読にしても、ゼミ参加者の各自の人生経験を背景として、個人にとって歴史とは何であったのかを問い、多様な解釈を交流していく対話にあるとあってよいでしょう。筆者自身も、こうした市民による学びあいのなかで、人間の生き方を問う歴史学の入り口に導かれたような気がしています。したがって、本ゼミでは、一定の歴史知識を前提とするものではありません。人生経験の対話の場と考えて、気軽にご参加いただければと思います。



田中雅孝（歴史研究所特任研究員）

担当者：田中雅孝

開講日時：毎月第4土曜日10：00～11：40

場所：歴史研究所研修室

受講生募集!

歴研ゼミ&ワークショップ 12月・1月の予定

会場：歴史研究所 研修室

建築史ゼミ

担当：福村任生（研究員）
12月16日／1月20日
（第3金曜日）19：00～21：00

近世史ゼミ

担当：羽田真也（研究員）
12月14日／1月11日・25日
（第2・第4水曜日）18：30～20：30
※12月28日は休講となります

近現代史ゼミ

担当：田中雅孝（特任研究員）
12月24日／1月28日
（第4土曜日）10：00～11：40
※今年度から月1回となります

思想史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場
12月7日・21日／1月18日
（第1・第3水曜日）19：00～21：00
※1月4日は休講となります

満洲移民研究ゼミ

担当：本島和人（調査研究員）
齊藤俊江（調査研究員）
第131回 12月3日／第132回 1月7日
（第1土曜日）10：00～11：40

地域史ゼミ

担当：太田仙一（研究員）
12月9日／1月13日
（第2金曜日）18：30～20：30

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL：0265-53-4670

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳などの症状のある方やマスクを着用されない方の受講はご遠慮ください。また、今後の感染状況により、延期または中止、会場の変更、参加者の制限をする場合がありますのであらかじめご了承ください。開催日の1週間前に開催可否を判断します。

開所時間：午前9時～午後5時 休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日
メール配信への切り替えをご希望の方は、E-mail: iihr@city.iida.nagano.jp まで